

孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム

第一部 座談会 議事録

(開催要領)

1. 開催日時：令和4年2月25日（金）16:30～18:00

2. 場 所：官邸2階大ホール

3. 出席者：

高橋 良太	全国社会福祉協議会地域福祉部長
宮田 裕司	全国社会福祉法人経営者協議会制度・政策委員長
吉田 建治	認定NPO法人日本NPOセンター事務局長
白井 智子	NPO法人新公益連盟代表理事
大空 幸星	NPO法人 あなたのいばしょ理事長 (SNS相談コンソーシアム代表)
清水 康之	NPO法人自殺対策支援センターライフリンク 代表
堀井 茂男	一般社団法人日本いのちの電話連盟理事長
遠藤 智子	一般社団法人社会的包摂サポートセンター (よりそいホットライン) 事務局長
奥田 知志	一般社団法人 生活困窮者自立支援全国ネット ワーク共同代表
湯浅 誠	認定NPO法人全国こども食堂支援センター・ むすびえ理事長
米山 広明	一般社団法人全国フードバンク推進協議会 代表理事
赤石 千衣子	認定NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ (シングルマザーサポート団体全国協議会) 理事長
北仲 千里	NPO法人全国女性シェルターネット共同代表
奥山 千鶴子	NPO法人子育てひろば全国連絡協議会理事長
村木 厚子	内閣官房孤独・孤立対策担当室政策参与
大西 連	内閣官房孤独・孤立対策担当室政策参与
北波 孝	内閣官房孤独・孤立対策担当室次長
田村 真一	内閣官房孤独・孤立対策担当室参事官
吉川 晃	内閣官房孤独・孤立対策担当室参事官補佐

(議事次第)

1. 開会
2. 座談会及び設立総会について
3. 準備会合参加団体から抱負等
4. 座談会

テーマ：地域における多様な主体の連携協働による孤独・孤立対策

- (1) テーマについて説明
- (2) 各団体意見表明
- (3) フリートーク
- (4) まとめ

5. 閉会

(配布資料)

- ・全国社会福祉協議会 高橋良太 地域福祉部長 提出資料
- ・特定非営利活動法人あなたのいばしょ 大空幸星 理事長 提出資料
- ・NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 奥山千鶴子 理事長 提出資料

○吉川補佐 改めまして、ただいまから「孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム設立総会 第一部 座談会」を開催いたします。

私は、本日の司会を務めます内閣官房孤独・孤立対策担当室の吉川です。よろしくお願いいたします。

本日の設立総会の第一部座談会については、YouTube配信を行っております。後ほど動画を公開させていただく予定ですので、御承知おきください。

なお、NPO法人全国女性シェルターネット共同代表の北仲千里様は、オンラインで参加いただいております。

まず事務局から本日の流れについて説明します。

田村参事官、よろしくお願いいたします。

○田村参事官 それでは、この後の本日のプラットフォームの設立総会の流れについて、御説明をさせていただきます。

本日の設立総会は、大きく二つに分かれております。第一部と第二部でございます。

第一部は、先ほど御案内がありましたように、主に座談会をこれから開催いたします。

第二部につきましては、設立総会としての議事等がございます。

第一部では、この後、準備会合に御参加いただきました団体の皆様から、プラットフォームにおけます抱負等について、御発言をいただきたいと思います。その後、地域における多様な主体の連携・協働による孤独・孤立対策をテーマに座談会を行います。

第一部の終了時刻は18時を予定しているところでございます。

その後、会場内のレイアウト変更を行った上で、18時40分から設立総会をこの会場で開催いたします。

冒頭、野田孤独・孤立対策担当大臣から御挨拶をいただいた後、規約案の決議、議長の選出を行い、幹事の選任、紹介、そして、主な活動の報告等を行います。その後、協力会員を代表して、地方団体と経済団体の方から御挨拶をいただいた後、最後に岸田総理から御挨拶をいただく予定でございます。

なお、第二部の設立総会につきましては、19時までと時間が大変限られておりますので、議事の進行につきましては、御協力を賜りますようよろしくお願いいたします。

最後になりますが、昨日からのウクライナの情勢に鑑みまして、特に第二部につきましては、急遽予定の変更等が出てくる可能性がございます。その点、お含みおきいただきますようよろしくお願いいたします。

以上でございます。

○吉川補佐 ありがとうございます。

続きまして、幹事団体就任予定の出席者の皆様から、プラットフォームにおける抱負等を順次御発言いただきたいと思います。

まず最初に、全国社会福祉協議会地域福祉部長の高橋良太様、よろしくお願いいたします。

○高橋氏 全国社会福祉協議会でございます。

まずプラットフォーム設立までの内閣官房はじめ、関係各位の御尽力に感謝を申し上げます。

私たち全社協は、都道府県・指定都市社協、また、市区町村社協とともに様々な地域生活課題の根底にある孤独・孤立対策に引き続き取り組んでまいりたいと思っております。

孤独・孤立対策に当たっては、公的施策の事業を展開する、都道府県や市町村自治体との連携が重要と考えておりまして、このプラットフォームにも御参画をいただいていることをとても心強く感じております。

日本全国で孤独・孤立対策の機運を高め、実践につながるよう、社会福祉法人・福祉施設、民生委員・児童委員、NPO・ボランティア、企業などと社会福祉協議会との一層の連携・協働を進めてまいりたいと思っております。

以上でございます。

○吉川補佐 ありがとうございます。

続いて、全国社会福祉法人経営者協議会制度・政策委員長の宮田裕司様、よろしくお願いいたします。

○宮田氏 全国社会福祉法人経営者協議会の宮田でございます。

本会は、全国各地の社会福祉法人約8,000、分野を超えた社会福祉施設を経営する法人の約半数が加盟する団体でございます。

現在もコロナ禍の困難に立ち向かいながら、人々の生活に不可欠な福祉サービスを継続し、また、高齢、障害、子ども、生活困窮などの分野を超えて、全世代にわたって包括的に支援するための取組を進めております。

深刻化する貧困や生活困窮、また、孤独・孤立への支援は、私どもの重要な使命、役割であると考えております。

このプラットフォームを通して、様々な主体が連携・協働することで、全国各地での孤独・孤立への支援の輪が広がることを期待しております。

以上でございます。

○吉川補佐 ありがとうございます。

続いて、認定NPO法人日本NPOセンター事務局長の吉田建治様、お願いいたします。

○吉田氏 日本NPOセンターの吉田と申します。

まずプラットフォームの設立に向けて御尽力いただいた関係者の皆様に敬意と感謝を申し上げます。また、各分野、各課題の最前線で活躍される皆様と御一緒できること、大変心強く感じております。

日本NPOセンターとしては、これまでのネットワークと実績を活かしまして、企業やNPOなど、セクターを超えた多様な連携を生み出すことで、各分野の皆様の活動をこれまで以上に後押ししていきたいと考えております。

また、目の前に突きつけられている課題解決のアプローチとともに、孤独・孤立状態に陥ることを未然に防ぐ、もしくは課題を最小限にとどめるために、人と人とのつながりの機会が多様にあることが重要であると考えております。

そのために、地域の中で分野を限定せず、小規模であっても多様な活動が生まれまして、そういったNPOが育まれることが重要だと感じております。そうした環境づくりを各地のNPO団体の皆様と連携して進めていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

○吉川補佐 ありがとうございます。

続いて、NPO法人新公益連盟代表理事の白井智子様、お願いいたします。

○白井氏 新公益連盟の白井智子です。

このたび、9月からの御準備、本当にありがとうございます。

新公益連盟は、加盟112団体の中で、日頃から孤独・孤立関連で取り組む団体が多くございまして、40近くの団体が手を挙げて、孤独・孤立対策のための分科会をつくりました。このプラットフォームにも順次加盟をさせていただければと思っております。

デジタルを生かした孤独・孤立対策など、各団体の現場で好事例も生まれつつあります。プラットフォーム全体にもノウハウ提供などの形で貢献したいと思っております。

まずはプラットフォーム加盟団体の取組やノウハウについて、取材をしていただいて、

共有するところから始められたらと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

新公益連盟としても、総務担当としてプラットフォームそのものが機能するように、運営面で裏方として貢献したいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

以上です。

○吉川補佐 ありがとうございます。

続いて、SNS相談コンソーシアムを代表しまして、NPO法人あなたのいばしょ理事長の大空幸星様、よろしくお願いいたします。

○大空氏 大空です。よろしくお願いします。

本日、こうした会を開いていただいて、また、プラットフォームの設立に当たって、様々な御尽力いただいた皆さん、大西政策参与をはじめ、本当にありがとうございます。

この政策はいろんな切り口があるのだと思います。いじめとか、虐待とか、LGBTとか、女性とか、個々の事案から見ていく場合と、もしくは政策の全体的なことです。要は孤独や孤立という言葉聞いたとき、ここにいる全員もそれぞれ思い描くものが違うのだと思うのです。ですから、孤独・孤立対策というのはどういう政策であるのか、今、孤独を抱えている人、孤立状態にある人を支援する。もしくは予防的な観点です。孤独や孤立に陥らないようにしていく。両方ということも当然あり得ると思いますが、その政策の目的、対象がしっかりしていかなないと、今回はスモールスタートではなくて、かなりのビッグスタートで、たくさんのアクターたちが入ってきますから、会自体が流れてしまうことも考え得ると思いますので、しっかりと目標と対象を定めた上で、また、そういう議論もプラットフォームの中でできればと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○吉川補佐 ありがとうございます。

続いて、NPO法人自殺対策支援センターライフリンク代表の清水康之様、よろしくお願いいたします。

○清水氏 先ほどの言及がありましたけれども、この一両日、報道やSNSなどでロシアによるウクライナの侵攻を目の当たりにして、改めて平和について考えさせられています。というのは、私、学生時代はロシア語を勉強していたこともあって、ウクライナに1か月間、語学留学をしていました。当時の友人が今もウクライナに住んでいますし、SNSでその友人とやり取りをする中で、何もできない自分自身の無力感にもさいなまれていたり、あるいはいつ友人や友人の家族が被爆を受けるなりして、戦争の犠牲になってしまいかねないと、不安にも駆られているところです。

ただ、同時に翻って、日本は平和と言えるのかとも思うのです。1,610人、これは先月の1月に日本の自殺で亡くなった人の数の暫定値です。昨年も1年間で2万人を超える人が自殺で亡くなりました。私は、平和というのは「命の危機に脅かされることなく暮らすことのできる状態」ではないかと考えています。その意味でいうと、日本は平和だと素直に

は言い切れないとも考えています。

このプラットフォームの取組、試みは、「誰も命の危機に脅かされることのない社会」の実現を目指すものでもあると、私は受け止めています。皆さんと一緒に、私たちに、日本でできることを実行していければと思っている次第です。

NPO法人自殺対策支援センターライフリンク代表の清水です。よろしくお願いします。
○吉川補佐 ありがとうございます。

続いて、一般社団法人日本いのちの電話連盟理事長の堀井茂男様、お願いいたします。
○堀井氏 日本いのちの電話連盟の堀井です。よろしくお願いします。

いのちの電話は、孤独なさみしい人たちの声を聞かせていただくということで、1971年以来、昨年で50年を迎えました。全国で50センター、53局の電話で話を聞かせていただいています。

従来は70万件、6,500人のボランティアで相談を受けていましたけれども、コロナでセンターの閉鎖、あるいは縮小、休んだり、ボランティアの方もコロナに罹患する等で休んだり、昨年、一昨年と52万件ぐらいに減りました。しかし、相談員はなお5,500人以上おりまして、日々活動して、孤独な人たちの心を聞かせていただいております。

プラットフォームに関しては、孤独・孤立な人たちの声を聞く、命を守る、自殺を守るというのは、各一人一人の力で、たくさんの連合体でやっていく必要があると思います。そういう意味で連携をして、みんなの力で少しでも一人一人、大切な人たちの援助となるように活動していきたいと思っています。よろしくお願いします。

○吉川補佐 ありがとうございます。

続いて、一般社団法人社会的包摂サポートセンター（よりそいホットライン）事務局長の遠藤智子様、お願いいたします。

○遠藤氏 社会的包摂サポートセンターの事務局長の遠藤でございます。よろしくお願いします。

来る前に、孤独・孤立の官民連携プラットフォームに対して、自分たちが今までやってきたことの中でどんなことができるだろうと考えておまして、よりそいホットラインは、全国で24時間、365日の電話相談とSNS相談を受けているのですが、1,500団体ぐらいのグループや支援団体の皆さんとの連携でやらせていただいている、あと、行政の皆さんとも現場でつながらせていただいています。

民間団体の得意なところと苦手なところ、行政の得意なところと苦手なところには、大変大きな違いがあって、私も含め、ホットラインの支援者の皆さんも、現場の中で様々な意味での調整を10年、ここで体験をさせていただいたと振り返りながら思います。

孤独・孤立の解消のための官民の連携のときは、相互の官と民のいろんな団体同士の理解が物すごく必要だと思っていて、どなたかおっしゃいましたけれども、とても大きなたくさんの多様な方の参加でスタートする中で、いろんな立場の方たちと言葉と心が通じるような、バイリンガルだったり、トリリンガルだったりすることが必要だと思っていて、

私たちが今までやってきた体験がうまくそれに資することができるように、お互いに進められるようなことになるように努力していきたいと思っています。よろしくお願いします。

○吉川補佐　ありがとうございました。

続いて、一般社団法人生活困窮者自立支援全国ネットワーク共同代表の奥田知志様、お願いいたします。

○奥田氏　今、紹介いただきました奥田です。今日はよろしくお願いいたします。

いよいよ始まるということで、すごく期待をしております。

生活困窮者のステージは、2015年以降、国が生活困窮者自立支援制度を立ち上げて進んでおりますけれども、最大の特徴は、これまで経済的な困窮に焦点を当てて、どちらかというと、国は現金給付、あるいは現物給付のところに焦点を当ててきましたけれども、もう一方で、社会的な孤立が問題なのではないか。特に2018年の改正において、地域社会からの孤立の状況という一言が入りまして、国の政策の中で孤立という言葉が初めて入ったところだったと思います。

そういうことで、問題を解決していただくだけではなくて、つながりをどうつくるかということが生活困窮者支援の大きな課題でありました、対象者を制度の属性で見ないとか、あるいは断らない、解決が難しくてもつながり続けていこうという姿勢で臨んできております。

先ほど清水さんがおっしゃったように、今、世界は大変な状態になっていますけれども、さみしいと貧しいが重なる瞬間というのは、非常に深刻になります。私はその先に戦争という状況、あるいは戦場に行かざるを得ない人たちの悲しみもあるだろうと思っています。そんなことを思いながら、今日はこちらに寄せていただきました。今日はよろしくお願いいたします。

○吉川補佐　ありがとうございました。

続いて、認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ理事長の湯浅誠様、お願いいたします。

○湯浅氏　皆さん、お疲れさまです。よろしくお願いします。

こども食堂ですが、今、6,000か所になりまして、コロナ禍の中でも2年間で2,000か所増えました。ソーシャルディスタンスが言われているからこそ、何とかつながり続けようという姿勢の人々の力強さを感じるのですが、そのうちの8割ぐらいは、交流を目的とした居場所で開催をされていまして、孤独・孤立の人をあなたということでターゲットングして開いているわけでもないし、集まっている人たちの中からそういう人を浮かび上がらせる、言わば集団健診みたいに、誰が孤独・孤立の人なのかと見ながら開催しているわけでもありません。

実際は皆さんと一緒に食べたらおいしいということで交流している中で、地域全体の健康度を上げていくというか、健康度は心身の健康度です。なので、地域全体のウェルビーイングを高めていく。そういうことを通じて、孤独・孤立に陥るような人が出ない地域づ

くり、社会づくりに資する、そういう位置づけになる活動なのだろうと思っています。

そんな意味では、ウェルビーイングを高めるためのポピュレーションアプローチみたいなことが言えるのではないかと思いますのですけれども、こうした取組が地域単位でミクロに見たときに、ある小学校区の中では、相談支援で頑張っている方もおられれば、こういう交流の居場所で一生懸命やっている方もおられると思うのです。そういう人たちが小学校区内、市町村内でうまくやっていける、うちの地域でみんなが笑顔でいられるような地域づくりができる、そのためにここが役割を果たせるということが目指すところだと思っています、東京で全国のつながりができてよかったと地域に言ってもらえるような活動ができればと思っています。よろしくお願いします。

○吉川補佐 ありがとうございます。

続いて、一般社団法人全国フードバンク推進協議会代表理事の米山広明様、お願いいたします。

○米山氏 米山です。よろしくお願いいたします。

私が特にこのプラットフォームに期待を寄せておりますのは、基本方針にも示されております、孤独・孤立に至っても支援を求める声を上げやすい社会とする、この部分になります。私たちNPOもその助けを求める声を受け止める受皿になることができると思いますし、また、異なるセクター間で手を取り合うことで、より一層大きな受皿になっていくのではないかと考えております。

また、様々な領域で活動されている団体の皆さんと連携することで、これまで見えてこなかった課題も見えてくると思いますし、連携の中で課題に対する新しい解決策も生まれてくるのではないかとということを期待しております。

私たち非営利団体が孤独・孤立の問題に対して担う役割のところでは、非常に大きなものがあると感じておりますので、今日、プラットフォームに参加する皆様ともしっかりと力を合わせて、孤独や孤立対策に積極的に取り組んでいきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○吉川補佐 ありがとうございます。

続いて、認定NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ（シングルマザーサポート団体全国協議会）理事長の赤石千衣子様、お願いいたします。

○赤石氏 皆さん、よろしくお願いいたします。NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむの赤石です。

孤独・孤立対策官民連携プラットフォームをここまで皆さんに御努力いただきまして、ありがとうございます。

私が呼ばれたのは、ひとり親と呼ばれる人たちがどうしても孤独に陥りやすいということで、参加させていただいているのだと思います。ここにどういう心構えで臨んだらいいのか、心がすごく揺れるわけなのですけれども、2月の相談では、非常に苦しい方たちが増えています。さらに相談対応している中で、はざまにいらっしゃる方たちの問題解決は

非常に大変で、全力を挙げないと解決の道が見えてこないということがございます。ですので、孤独といったときに話す相手がいない方たちと、その全力を挙げて解決の道をつくらなければいけない方たちと、いろいろな対応の孤独があると思っております。

対応の手法も様々だろうと思うので、私がここに期待することとしては、いろいろな手法がすり合わせられ、情報交換ができること、それから、対象者の対応を情報共有できること、先ほど地域という言葉も出てきましたが、レイヤーがいろいろあると思うのです。そのレイヤーごとにつながりをつくるところで、どこが一番いいレイヤーなのかというのは、いろんな考え方があるのだろうとか、そういうことをいろいろ思っているのですけれども、ここでそういうものが全体的に見えてくることを期待しております。私どものやっていることをお伝えしたいですし、また、皆さんからの情報をどんどんいただければありがたいです。ありがとうございます。

○吉川補佐 ありがとうございます。

続いて、本日、リモートでの御参加で、NPO法人全国女性シェルターネット共同代表の北仲千里様、お願いいたします。

○北仲氏 全国女性シェルターネットの北仲です。

今日は広島からなので、コロナの関係でそちらに行けなくて、リモートで失礼します。

全国女性シェルターネットは、DVなどの被害者を支援している団体の全国連合体です。私たちが対象にしているのは、一見、愛がある親密な家庭とか、恋人同士とか、親しげな関係とか、性関係の中にある恐怖とか、虐待を対象にしています。

こういう被害者の支援というのは、かなり専門的な支援でもありますし、各地域で直接被害者の方に会って、救出をして、支援者が信頼関係を構築しながら、長い間にわたって行うという支援です。

しかし、こういうテーマというのは、すごく新しいテーマなので、言わばこれまでは誰も耳を傾けなかった声を聞くという活動になります。ですので、地域での支援力というのは、まだ弱いものです。援助できる専門職も、支援者も、地域の協力者もまだとても少ない状況です。

私たちはいろんな方とつながっていきたいです。今日のようにNPOのほかの活動をされている皆さんや行政の関係者、企業や様々な専門の知識なり、分野を持っている皆さんともつながって行って、日本のこうした被害者を日本中どこでも十分に支援していけるような社会にしたいと思っています。

そういう意味で、いつも横目で、団体はきっとこういう活動をしているのだろうと思っていたところとざっくばらんにいろんなお話ができるということで、非常に期待しております。よろしくお願いします。

○吉川補佐 ありがとうございます。

続いて、認定NPO法人子育てひろば全国連絡協議会理事長の奥山千鶴子様、お願いいたします。

○奥山氏 ありがとうございます。

乳幼児期の子育ての交流の場を運営している全国の中間支援組織NPO法人子育てひろば全国連絡協議会の奥山です。

全国的には8,000か所程度あります。公共施設、民家や保育所等に併設される等多様な場所で運営されておりますが、そのうち特にNPO法人等で実施している1,300ぐらいの団体が加入している団体です。

支援対象は、妊娠期から主に幼稚園、保育園、認定こども園等に通う前の育休中も含めた子育て家庭となっております。

妊娠、出産という本来ならば祝福されるべき状況のところで、御事情があったり、多くの子育てをされている家庭も核家族という中で、いきなり地域で孤立してしまうというようなことがあります。

ただし、妊娠、出産で子育て家庭は初めて子どもが育つ社会に関心を持つことがあり、ここを地域がしっかりと受け止めていくことが、孤独や孤立といったところを防ぐ予防的な機能を果たしていくのではないかという思いで活動をしてまいりました。

本来、子どもを育てるには、村中のみんなの力が必要と言われるわけですが、子どもの成長、発達には周りから受け入れられ、親子共々安心できる居場所であり、つながりが必要だと思っております。

今回、人生のスタートを孤立させないという思いを込めて、今日はここに参集していただきました多様なNPOの支援機関、官民連携して、これから進めていくということに大変期待をしておりますし、賛同もしております。ぜひこれから皆さんの活動を学ばせていただいて、よりよい連携ができればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○吉川補佐 皆様、ありがとうございました。

このほか、内閣官房孤独・孤立対策担当室が幹事を務めます。

それでは、時間となりましたので、プレスの方は御退室ください。ありがとうございます。

(報道関係者退室)

○吉川補佐 続きまして、座談会に入ります。

ここからは、進行を内閣官房孤独・孤立対策担当室の北波次長にお願いします。よろしくお願いします。

○北波次長 御紹介いただきました、私、内閣官房孤独・孤立対策担当室で次長をしております北波と申します。

今日はこういう状況の中ではございます。どういう状況かということはありませんけれども、非常に不安が広がっている中にもかかわらず、まだコロナが収まっていない中でも、お足をお運びいただき、御参集いただきまして、本当にありがとうございます。

私ども孤独・孤立対策担当室は、昨年2月12日に担当大臣が指名になり、また、2月19日に担当室が設置され、それから1年間、活動をしてまいりました。

最初は緊急フォーラムということで、官邸で開催をさせていただき、内閣官房主催でいろいろなテーマで10回にわたりますフォーラムをさせていただいたり、総理も含めて現地にお伺いし、車座での対話をさせていただきました。その中で、今、御参集いただきました皆様と出会い、また、今回のプラットフォームでも御尽力賜ろうということをお願いをしているところでございます。

今日はお集まりいただき、また、力強いお言葉もいただきまして、本当にありがとうございます。

今回は座談会ということで、テーマを御提示させていただいて、自由に御意見を拝聴し、また、意見交換をしたいと思っております。

座談会では、プラットフォームの主な活動の一つでもあります地域における多様な主体の連携・協働による孤独・孤立対策です。連携・協働を一つのテーマとして、6時ぐらいまでの1時間程度、議論したいと考えております。

今回のプラットフォームにつきましては、NPOと支援組織の連携を行うために立ち上げた組織でありまして、言うまでもないことですが、連携というのは主な活動の柱の一つでございます。

私どももこちらから言うのもどうかということではありますが、コロナ禍で孤独・孤立に悩む方が増加する中で、今の御挨拶の中でもありましたが、様々な問題、課題をお持ちの人たちに多様なアプローチがある。それも個々の支援組織だけの活動ではなく、連携をし、また、そういうものによって地域でも根差していく、こういうことではないかと思っています。

今後のプラットフォームでございます。先ほどの御挨拶の中でも幾つかヒントをいただきましたが、プラットフォームの事業をこれから進めていく中で、こういう支援をする組織の間の連携をどのように考えていくべきか。支援組織間だけではなくて、ここは官民連携プラットフォームでございますので、行政、国、地方、そういうところとの関係をどのように運営していけばいいのか、どう考えていけばいいのか、こういうところについて、皆様に御議論いただきたいと思いますと思っております。

本来であれば、御挨拶の順の逆から御指名ということもあるのですが、今回はそのようなことはいたしませんで、このテーマにつきまして、各団体の御意見ということで、まずは一巡いただければと思います。

最初、全国社会福祉協議会の高橋部長からよろしく願いできますでしょうか。

○高橋氏 全社協でございます。

資料を用意しておりますので、御覧いただければと思います。

2 ページに社協の組織について紹介をしております。社会福祉協議会は、全ての市町村、政令指定都市の区、都道府県、全国の段階に組織をされております。

3 ページにありますように、昨年、全社協では、全国の社協を対象にコロナ禍における生活困窮者支援の状況に関する調査を実施しております。

4 ページにその結果を掲載しております。社協が受託する生活困窮者の自立相談支援機関におきまして、世代や雇用形態、業種によって差があるものの、幅広い層にわたって相談者が増えていることが分かっております。特に働き盛りの中高年層の方、非正規や派遣労働の方、ひとり親世帯、外国籍の方、そうした相談が増えています。

5 ページを開いていただきますと、今後、生活困窮者支援に関して社協の強化が必要な点について、6 割以上の社協が、就労支援の強化、相談窓口に来られない人へのアウトリーチ、関係機関との連携を挙げております。

6 ページ、最後になりますけれども、これらを踏まえまして、地域における多様な主体の連携・協働の課題について御提起をしたいと思います。しております。

コロナ禍により深刻なダメージを受けた孤独・孤立を背景とする様々な地域生活課題を抱える人たちに対して、一つ目として、潜在化する支援が必要な人への気づきやアウトリーチ。

二つ目として、コロナ禍で顕在化した地域生活課題に対応する社会資源の開発。

三つ目として、地域に発信し、地域を巻き込んだ対応。

さらには四つ目として、地域になじめない人、地域から孤立し排除される人への対応、これが必要と感じております。

これらに対応するため、福祉分野及び福祉以外の分野の官民、NPO等の連携・協働が求められていると思っております。

以上でございます。

○北波次長 ありがとうございます。

引き続きまして、社会福祉法人経営者協議会の宮田様、お願いします。

○宮田氏 各地での孤独・孤立対策を進めるには、NPOや一般社団法人等、また、社会福祉法人、社会福祉協議会や行政、専門職の団体などがその長所を生かし、課題を補い合いながら、生活に寄り添った支援を実現することが必要であると考えております。

私どもが長きにわたって福祉を担ってきた中でも、孤独・孤立は、支援を必要とする方々の自己実現、個人の尊重を具現化する上での大きな課題であり、日々向き合ってきた援助ニーズの一つでもあります。孤独・孤立といった状態だけではなく、その背景にある福祉課題を捉え、支援することが私どもの専門性であると考えております。

現在、全国各地の社会福祉法人、また、複数の社会福祉法人が連携・協働して、孤独・孤立、生活困窮などへの支援を進めているところであります。

複数の法人と都道府県社協との連携については、全都道府県での取組が行われ、加えて、約560の市町村エリアでも仕組みが構築され、子ども支援やひきこもり支援をはじめ、生活困窮者の相談支援、居場所づくり、社会参加の支援などの活動を全国各地で展開しております。

特にコロナにより孤独・孤立などが深刻化する中、生活に困難を抱える方々の相談支援、食事の配達などを通じた見守りや人とのつながりの機会づくりなど、様々な工夫の中で進

めてまいりました。

さらに災害が頻発する中、災害時の孤独・孤立への対応も重要であります。私どもとしては、一般避難所で支援を行う福祉専門職チームDWATの組織化も進めており、全国各地で6,000名を超える現場スタッフが災害に備え、登録をしております。

こうした取組を御理解いただきながら、各地での孤独・孤立対策においても、連携を図っていただければと思っております。

私どもとしても、福祉の専門性やケアワーク、ソーシャルワーク機能とともに、全国各地に所在するという強みを生かしながら、本日、お集まりの皆様をはじめ、様々な方々との相互理解と連携を図り、地域共生社会の実現に向けた取組をさらに進めてまいりたいと考えております。

以上でございます。

○北波次長 ありがとうございます。

続きまして、日本NPOセンターの吉田様、お願いします。

○吉田氏 このテーマは、私どもが地域の中でも連携が非常に重要だと主張してきたこともあって、非常に重要だと感じておりますけれども、一方で、準備会の議論でも、地域での解決がなじまない課題があるという議論があったと思います。この視点は重要だということが私の学びで、この二つのアプローチを両輪で進めるべきだろうと感じています。

その上で、今日のテーマについてですけれども、多様な連携の多様というのは、直接的に孤独・孤立対策に関わるわけではない分野の団体も含めて、福祉の分野だけではなく、もっと広げたイメージが必要なのだろうと感じています。

例えば熊本地震のときに地域で生き物観察を得意とされている団体が避難所の様子を見て、親子で避難されている方向けに生き物観察会を開催され、避難者のつながりを生むことにつながったというお話を聞いておりますけれども、こういった多様な団体の専門性を少し広げる、もしくは少し視点をずらすところに、まだまだ可能性があるのだろうと感じています。

そのところで私どもNPO支援組織のネットワークなどがつなぎ役を果たしていけるのではないかと感じております。分野別も重要ですし、それをさらに超えるアプローチが必要なのだろうと感じております。

○北波次長 ありがとうございます。

それでは、順に行きます。新公益連盟の白井様、お願いします。

○白井氏 ありがとうございます。

新公益連盟は様々な領域の支援団体がありますが、特に私自身、20年関わってきた不登校、ひきこもり、発達障害の方々のサポートから見える風景をお話したいと思います。

今、全国で20万人近くの小中学生が不登校状態にありまして、残念ながら学校がセーフティーネットとして機能していないという状況です。その中で孤独・孤立状態にあるのに、それに本人も周りも気づいていないお子さん、学びどころか、日々の御飯もまともに食べ

られないという子どもさんにもたくさん出会います。

特に課題感が強い孤立・孤独状態に陥りやすいのは、保護者がメンタルに課題を抱えている、あるいは保護者自身が発達課題を持っているが、自覚がないというようなケースが多いという実感を持っております。

一人も取り残さない社会をつくるには、もはや家庭という単位だけではなくて、社会全体で子どもたち、人々を支えていかなければいけないということを感じます。SOSを待つのではなくて、アウトリーチができる体制を整えること、サードプレースを増やして、一人一人に寄り添う体制をつくる必要があると感じます。

もう一つ、まさに今、孤立状態にあるウクライナ情勢に鑑みまして、我が国にいらっしゃる両国の関係者が孤独・孤立状態にならないようにということ、また、特に日本が遅れていると言われている難民の受入れ体制です。これもしっかり考えなければいけないという状況になっていると思います。

以上です。

○北波次長 ありがとうございます。

続きまして、あなたのいばしょ理事長の大空様、お願いします。

○大空氏 大空です。よろしくお願いします。

お話を聞いていて、すごく難しいと思いました。結局、1人2分ぐらい、これから話していくとしても、恐らく皆さんが取り組んでおられるテーマのことをおしゃべりになるのだらうと思うのです。そうなったときに、プラットフォームとして何ができるのかというところを考えると、すごく難しいと感じました。

地域における多様な主体の連携・協働ということで、地域における連携・協働をやっていない団体はないと思うのです。特に今回、ここに御参加されている団体さんは、それぞれのテーマにおいて、連携・協働を既にされていると思います。ですから、例えばまだ連携・協働ができていないというような団体さんがあるのであれば、できている団体のやり方であったり、実際にそこに向けてどういう課題があったのか、そういうことを共有することも必要です。

孤独や孤立の対策の政策のアウトカムが明確ではないので、難しいのですが、例えば恣意的に政策の対象者を選ばないためには、ある種の調査が必要です。客観化のプロセスで絶対に必要で、今日は資料をお配りしているのですけれども、私たちのNPOと国立研究開発法人科学技術振興機構が共同で調査をしたのです。コロナ禍での人々の孤独に関する調査ということで、これを実施した結果、孤独は高齢者というイメージが日本は根強いのですが、実際に調査してみると、孤独感が一番強かったのは20～29歳の若者だったのです。

こういうふうに調査をしてみると分かることが結構あったりもします。なので、例えば虐待とか、DVとか、もしくは自殺というのは、皆さんのそれぞれのおかげで政策課題に乗っていますけれども、例えばLGBTとか、難民という問題については、政策の課題に乗りにくいわけです。ですから、そうしたときに恣意的に対象者が選ばれないように、エビデン

スに基づいてちゃんと対象群を洗い出していったら、そこはどうしてもビジョンドリブンのNPOは多いと思いますけれども、感情を脇に置いて、客観的にエビデンスに基づいて、孤独・孤立対策として、プラットフォームとして何を重視するのかということを、いま一度、一番最初の段階で議論していかないと、皆さんがそれぞれ好きなことを言って、まとめて終わるみたいな、そして、結果は何も残らなかったみたいなことになりかねないと思うので、マクロな視点を持って議論することが必要ではないか。今回のテーマを聞いていて思っていたところです。

○北波次長 ありがとうございます。

続きまして、ライフリンク代表の清水様、お願いします。

○清水氏 概念的な話と具体的な話を一つずつさせていただきたいと思います。

まず概念的な話でいうと、自殺対策の取組を振り返ると、即効性のある万能薬を求めないということが大事だったのではないかと感じます。一発逆転ホームランを狙わないと言ってもいいかもしれません。

具体的に言うと、最初、自殺対策は2006年に基本法ができて、ただ、この基本法でやったことというのは、自殺は社会の問題であって、社会全体で対策を進めていく、調査をするとか、連携を進めるというスローガン的なことでしかなかったのです。

ただ、スローガンはもちろん大事ですが、スローガンで終わらせてはならないということで、次に取り組んだのは、2010年頃に3点セットの改革が進められました。3点セットというのは、地域の自殺データの公表です。市町村単位でどういう人たちが亡くなっているのかという地域の自殺のデータを毎月公表していくということが1点です。

あと、地域のデータを使って自治体が対策を進めるためには、当然ながら財源が必要なので、このときは基金の造成ということで、3年間で100億円という地域で自殺対策を進めるための予算を確保していただきました。

あわせて、そうしたお金があっても、データがあっても、やるタイミングがなければなかなかやれないということで、例年、日本で自殺が増えるのは3月なので、これを自殺対策強化月間に定めました。つまり取り組むタイミングもセットで設けました。

この3点セットの中で自殺対策が少しずつ進み始めて、さらに流れを止めないためにということで、2016年頃に今度は4点セットの改革が行われました。その一つは、自殺対策基本法を改正して、全ての都道府県、市町村が自殺対策の計画をつくらなければならないということで、地域自殺対策計画の義務化です。

これに併せて、義務化されても予算がなければ、基金は御承知のとおり、いつ切れるかわからない年度ごとの予算ですので、安定的な予算がなければ、地域の対策が進められないということで、予算を基金から当初予算の交付金に切り替えたというか、予算を恒久化するようなこともやりました。

あわせて、予算を恒久化して計画を立てられても、実行するために後押しをしてもらえないと、対策を進められないという地域の声があったので、市町村や都道府県を支援する

組織の設置をしました。

4点セットの4点目としては、地域自殺対策トップセミナーということで、都道府県を全部回って、各都道府県の市町村長を対象にした自殺対策のセミナーを開催して回りました。そのことによって、それぞれの地域で行政トップがリーダー役を担いながら、全庁的な取組で自殺対策を進めていくような動きが全国で広がっていったことがあります。

もちろんまだまだやらなければならないことはあるわけですが、ただ、振り返ってみると、そのように進めてこられたのも、一発逆転を狙わず、とにかく常に何かを動かしている、あるいは止まらないようにするということによって、そこに関わる人の関心やモチベーションが下がらず、かつメディアの関心も薄れずというようなことで枠組みが進められてこられたと感じています。これが概念的なことです。

翻って、地域における多様な主体の連携・協働による孤独・孤立対策は、具体的にこういうことがあったらいいのではないかと思うことがあって、それはすぐにでも始められることなので、ぜひ御提案したいのですけれども、私たちライフリンクもそうですし、皆さんの団体でも受けた相談だったり、あるいは関わっている方の中で、自分たちの団体ではどうしていいかわからないようなことはあると思うのです。

その中で、先ほど大空さんから指摘があったとおり、既にいろいろな団体と連携をしながら、皆さんは既にやっつけちゃいます。ただ、これだけ多くの分野の方たちが集まると、今までの連携の枠組みをさらに広げて、対応の選択肢、オプションをそれぞれが持ち得ることができるのではないかと思うので、コミュニケーションツールを使って、セキュリティの問題だったり、個人情報扱いの問題だったりをクリアしなければならないのですけれども、こういう相談者がいて、対応が困っているのだけれども、どうすればいいですか、何かできる団体はありませんかみたいなことをお互いに投げ合うというのですか、助けを求め合えるようなものがあると、ここに関わるインセンティブは常に保たれると思いますし、そうしたことによって、具体的に物事が動いていき、推進力はどんどん増していくことになるのではないかと思います。

大所帯がゆえに機能不全に陥るリスクは高いと思っています。なので、機能不全に陥らせないような具体的な仕掛けを幾つかやりつつ、あと、大きなビジョンでもって施策として進めていくという両輪でやっていく必要があるのではないかと思います。

以上です。

○北波次長　ありがとうございました。

続きまして、日本いのちの電話連盟の堀井様、お願いします。

○堀井氏　いのちの電話連盟は、希望的なことをいろいろ考えたいのですが、まず私たちの活動そのものは、今、ここ十数年ぐらい、相談員は減少傾向にありますし、高齢化をしてきて、相談員のエネルギーが減少してきますし、2010年前後にあった相談件数がだんだん減ってきて、3年前は62万件ということで、70万件から減ってきて、相談員も7,000人いたのですが、6,500人、6,200人、去年は5,500人ぐらいになりまして、減少傾向なので

す。その辺をもう少しきちんとやっていく、立て直すということをまず考えています。それに対して、厚労省の協力もしていただいたりしているのですが、相談員の募集とか、いろいろしてきています。

その中で、コロナ禍という逆境といいますか、センターの閉鎖とか、ボランティアのコロナ罹患とか、三密制限などでこれまでのような研修や集合ができません。具体的な対面の指導研修ができないということは大きな弊害なのです。しかし、こういう状況の中で頑張らなくてはいけないという逆のエネルギーが感じられてきているのです。それが非常に大事な要素だと思っています。

昨年からボランティアの応募も増えてきていますし、前向きなエネルギーが出てきつつあるのです。これを生かすと同時に、こういうときに孤独・孤立対策のプラットフォームを考えていただいたので、こういうエネルギーをプラスの方向に持っていきたいと思います。それぞれの組織の方もいろいろな苦労があると思います。いのちの電話はいのちの電話で苦労があるわけですが、そういう苦労も一緒にしよい込みながら、それでお互いが元気を出すようなことをできたらいいと思っています。

基本的に日本の皆さんは、どちらかというと、希望が持てない、生きがいが少ない、的などところがあるのではないかと思います。その辺をいかに前向きに考えられるような世の中にしていくか。戦争が始まったりして大変なわけですが、そういうような逆境とか、困ったことがあったら、それをそのままにせず、それを生かして前向きに行くようなことを考えたいと思いますし、それをこのプラットフォームの皆さんとともに連携で分かち合いたい、そして、前向きに考えていきたいと思っています。

実際に電話相談というのは、御存じだと思いますが、新規の人をどんどん受けたいし、孤独なさみしい人と話をしていきたいわけですが、リピーターという方がおられて、新しい方の相談が受けにくくなる状況もあります。その辺を何とかしていくということをみんなで考えて対応していますし、困ったところでしぼむのではなくて、それを生かして、あるいは利用して、何とかしていきたいと思っていますので、皆さんとともに苦労を分かち合う、あるいは目的を分かち合って命を助けたい、孤独な人たちの助けになりたいという気持ちで前向きにやっていきたいと思っています。よろしくお願いします。

○北波次長 ありがとうございます。

続きまして、よりそいホットラインの遠藤さん、お願いします。

○遠藤氏 私の今のところの状況の問題意識としては、困りごとを抱えている人たちのニーズや期待に今の相談支援の仕組みが応えられているのかということがあって、特にコロナでダメージを受けた人と受けなかった人の差が毎日広がっている気がすごくして、困りごとを抱えた方の姿というのは、社会からも相談を受ける側から見えにくくなっているのではないかと気がすごくしています。

相談を受ける側が、困っていない側に圧倒的に所属をしていることがあって、想像力が足りないくらい、相談の中で出てくる状況の厳しさみたいなものがあります。電話でもSNS

でもこのところ気になっているのは、人に知られないで相談できる方法が必要なところなのです。相談していることを人に知られたくない、相談することが難しいという社会になっていることなのだろうと思います。相談できることを知らなかったという若年層が多いと相談員さんたちから聞いていますし、困っているのだけれども、孤立をしていて、どなたともつながれないし、何も情報がないという人たちがたくさんいて、そういう状況を私たち側はどのようにすればいいのかというのが、このところずっと考えていることです。

一つは、アウトリーチをして、相談をしてみようと説得をすること。もう一つは直接一緒にいることがすごく大事なことなのだと思っていて、私は専門職などではないのですけれども、相談事業のことを聞いていると、「取りあえず一人にしておかないで、誰かそばについているしかないのではないか」と思うわけです。でも、現実的にはそのように融通が利いて、取りあえず誰かがついていられるような公的な支援制度はなくて、現場で民間の支援団体の皆さんが創意工夫の限りを尽くしている状況だろうと思います。

今回のプラットフォームは、官民のところに自分として興味関心とこだわりがあって、現場で取りあえず一緒に考えようという支援を、先ほど清水さんが言われたことを聞いて、そうだと思っていたのだけれども、一つ一つの事例が起きたときに当事者を真ん中に据えて、地域で官と民のいろんな団体が一緒に考えられるような仕組みがこのプラットフォームから発信できるようになるといいと思っていて、特に公的な相談支援への信頼が薄れているところを取り戻さないと、つらい、と思っているところがあるので、そんなふうに考えています。

以上です。

○北波次長 ありがとうございます。

続きまして、生活困窮者自立支援全国ネットワークの奥田様、お願いします。

○奥田氏 私は幾つかあります。まず一つは、昨年のNPO助成は助かりました。ありがとうございます。これはとても分かりやすいので、いいと思います。

それはさておき、今回、プラットフォームができたことはすごく意義があると思っていますのですが、今回のプラットフォームは、ある意味支援者のプラットフォームだと思うのです。ここに集まっていらっしゃる方も、ステージは支援の部分の方が多いと思います。

孤独・孤立の問題を考えると、もう一つ手前の日常をどう捉えるかということが大事なのではないか。例えば生活困窮者のステージにおいても、問題解決をして自立支援をするのですけれども、なかなかうまくいきませんが、もう一つの問題は、それがうまくいったとしても、自立が孤立に終わっている。次のステージに移ったときに、結局、問題は解決したのだけれども、孤立しています。

一方で、社会の不安定さはこの30年ほど非常にはっきりしていますから、例えば再就職をしても、第2の危機、第3の危機が起こってくる。そういう不安定な就労の中で、第2の危機、第3の危機のときに横に誰がいるかというのは、生活困窮のステージだったのです。

そういう意味でいうと、我々NPOというのは、どちらかというと、問題を抱えた人と出会っています。そこで問題をどう解決するかということと一緒にあって伴走型でやってきています。言い方を変えれば、非日常が起こったときに登場しているのが我々という言い方になるかもしれない。その手前です。日常のステージをどう考えるか。

日常のステージというのは、ことが起こっていないところですから、そういう意味でいうと、日々の消費活動であったり、経済活動であったり、従来はそこを地域と言うべきだと思うのだけれども、地域は何をもって地域と言うのが難しい時代になっていて、地域があってもなくても、例えば毎日御飯を食べているわけです。そういう消費活動とか、経済活動はやっているわけです。

そうすると、今回のプラットフォームでいうと、ここの15団体はあるとしても、一方で、賛助団体とか、協力団体のところで、私は企業とか、民間のところをどう入れていくかというのは大事だと思うのです。今日、私は生活困窮の全国ネットワークの代表で来ているのですけれども、全国の居住支援法人の協議会の代表でもあるのです。不動産屋さんは、ある意味日常の最たるものの家を見ている人たちなのです。不動産屋さんの存在とか、あるいは生活協同組合さんとか、生命保険とか、新聞とか、宅配業とか、そういうところで日々見てくださっている方々とか、そのようなところをどう巻き込んでいくかというのは大事なのではないかな。

これは支援者に対して生活者のステージです。支援者のステージをつくるとともに、生活者のステージをどうつくるかということが大事なのではないかな。支援者目線だけではなくて、生活者とか、当事者など、日々出会っている人たちの中の関心をどう変えていくかということが大事です。

我々のステージとしては、先ほど清水さんがおっしゃったみたいに、どう連携するかということです。一緒になってどう協力して困難、苦難、生きづらさみたいなものを乗り越えていくのか。乗り越えることは難しいのだけれども、そのようなことを考えていきます。二つのステージがあるのではないかなということを考えました。

そのほかには、二つ目として、行政の制度自体がばらばらに動いているので、重層という発想が出てきたのはすごくよかったと思うのですけれども、現場では居住支援と一言言っても、地域の行政の中で住宅担当の人と福祉担当の人がいまだに一つにならないということになっているのです。せつかくこの辺りのいい制度があるのにばらばらです。これが二つ目です。

三つ目です。NPOもばらばらです。入り口を担当しているところ、中間支援をしているところ、受皿のところ、それぞれがうまくつながりません。これは先ほどの清水さんの話だと思うのです。ここのところを何とかしたいというのが次です。

最後なのですが、四つ目として、結局、孤立・孤独の問題は、先ほどの日常も含めて、顔の見えるステージなのだろうと思うのです。そうすると、町とか、市とか、その辺りが本気で動くかどうか勝負で、国レベルの方針と実際に何をするのか。

北九州市の宣伝をしておく、去年の9月に全国のフォーラムをやっていただいて、その後、うちの市長さんもその気になって、2月18日に官民共同の協議体が起こったのです。既に始まったのです。北九州は国のプラットフォームが始まる1週間前に既に始まりしました。こういうことが次々続いていく中で、国内の議論と実際に町をどうするかという話をうまくリンクすればいいと考えています。

私からは以上です。

○北波次長 ありがとうございます。

続きまして、むすびえの湯浅様、お願いします。

○湯浅氏 いろんな話があるので難しいですが、結論めいたことを言うと、全部やればいいと思います。大空さんが言った、エビデンスに基づいてハイリスクな方を効率的に支援するようなターゲティング型ハイリスク型のアプローチもやったらいいし、他方で、今、奥田さんが生活圏域という話をしましたけれども、広く言うと予防的な、深刻な状態に至らない人も対象にした、地域の健康度を全体として上げるような自治体レベル、小学校区レベルでのアプローチ、ポピュレーションアプローチもあっていい。どちらかではなくて、どちらもという感じでやれるといいのではないかと思います。

地域についても、地域はこの人たちに親切なのか、そうではないのかという話ではなく、地域でできることもあれば、地域でできないこともあるということで、場合分けをしながら、手法も違うし、アプローチも違うし、そういうところを整理していくようなことができたらいいいと思いながら聞いていました。

それでいうと、「地域」における「多様な主体」の「連携・協働」というのは、一つ一つの言葉が多義的なので、そこを分節化して、一覧を作れたらよいとも思いました。原案に対してああだこうだという意見も出てくれば、それによって豊富化されていきます。先ほどの全社協さんのレジュメの6枚目は、そこの最初の手がかりとしては、いい素材を御提供していただいたのではないかと思いますので、そういう辺りからいろんなことの整理をつけて、横串を入れられたらと思います。横串を入れるためには整理する必要があります。整理がつかないと、横串は入れようがありません。

あと、もう一つは、多様な主体のときに町内会とか、地域団体の方です。もちろん地域の事業者の方もおられるのですけれども、奥田さんの話と重なってしまうのでしょうか、いわゆる我々支援者のと言われるような人たちだけではないところの主体の多様性という話は私も意識されるといいと思いました。

そんなところです。

○北波次長 ありがとうございます。

続きまして、全国フードバンク推進協議会の米山様、お願いします。

○米山氏 米山です。よろしくお願いします。

まずここまでのお話の中で連携が重要だということは共通の認識としてあると思うのですけれども、冷静に見てみると、今日お集まりの皆さんとも、我々フードバンクとしても、

十分に連携ができているかというところ、そうではないのではないかと感じています。

なぜそれができていないのかというところなのですけれども、大空さんがおっしゃったとおり、団体ごとに課題意識も違いますし、活動内容とか、理念とか、価値観が異なっている中で、同じ目標に対して一緒に連携をしていくのは、結構難しいのではないかと御指摘は、最もではないかと思っています。

私たち活動団体は、特別に孤独とか、孤立というわけではないのですけれども、活動の領域ごとに独立し過ぎていることは言えるのではないかと考えておきまして、各団体の価値観が異なる中で、その垣根をどう崩してつながりをつくっていくかというところは、これからの孤独・孤立対策にとって重要だと感じています。

その中で、小異を捨てて大同につくという言葉があるのですけれども、確かに大きな孤独・孤立の問題の解決に対して、それぞれの団体の理念とか、価値観は小さいのかもしれないのですが、団体にとって理念とか、思いはとても重要なことだと思いますので、私たち自身が連携をしていくに当たっては、小異は捨てる必要はないと思っています。むしろ小異を認めつつ、皆さんもそうなのだけれども、私たちもそれぞれ異なる価値観を持っていて、何を優先するかというところも全く異なっていることを大前提として、違いを認め合いながら連携を進めていく必要があるのではないかと考えておりますので、そういった違いを乗り越えて、連携関係をこれからも皆さんとつくっていきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

以上です。

○北波次長 ありがとうございます。

続きまして、しんぐるまざあず・ふぉーらむの赤石様、お願いします。

○赤石氏 ありがとうございます。赤石です。

今まで聞いていて、皆さんが話されていることをここで突っ込みたいとか、ここをこうしたら、もうちょっとあれだという、いろんなメモを取りながら、よりよい何かができるだろうと思うのですけれども、この距離感と何かで枠組みをどうしたらいいのだろうということが、ここまで回ってきて、私が思っていることです。

皆さんは課題に対していろんな解決策を模索して今があり、すばらしいマネジャーであり、プレーヤーである方たちだと思うのです。その方たちの知恵をどうやってここに出していくのかというときに、違うワークショップ型とか、この間の知恵の車座という無責任にいろんなことを言い合うことで、何かが出てくる手法などもやって、面白かったのですけれども、もじもじしてしまうので、生産的なやり方で、例えば今後オンラインでワークショップをやって、ここでの知恵で持ち帰られたものをメインの会議に持ち帰りましょうとか、何かやっていかないと、エネルギーがもったいない感じがいたします。

いろんなことがあると思ひまして、私どもも提案などを考えてきたのですけれども、それより前にここで話し合うスタイルをもう少し生み出せるものにしていけるといいと思ったところですが、いかがでございましょうか。

いろんな方たちを巻き込むのに面白いものがまずあるといいと思います。面白いと言ったら、孤独・孤立というものをどうしていくのかというのは、もちろん大変な問題なのですが、しかし、そこにわくわく感がないと、その先に行けないのではないかと思います。

以上です。

○北波次長 ありがとうございます。

場の仕立て上、ソーシャルディスタンスと非常に広い場であるのは申し訳ないところはあります。会の進行等も工夫したいと思います。

続きまして、シェルターネットの北仲さん、お願いします。

○北仲氏 いろんな話題があると思うのですが、先ほど吉田さんや奥田さんが言われたことについて、私なりに言いたいと思いました。

一方で、私たちの支援が必要な人は、従来の地方自治体、あるいは地域組織です。町内会とか、そういうところでは関われないような、隠れていた人などを相手にしているので、従来の地域組織とか、地方自治体でちゃんとやれば、それでいいかというと、そういう問題ではないのですけれども、対面で直接支援をしなければいけないのです。

私たちはソーシャルワークだと思っているのですが、社協さんなどはまさにソーシャルワークをやっていることを自負していると思うのですが、私たちのようなテーマの相談がソーシャルワークだと認めていただけないというか、社協と同じようにソーシャルワークの主体になりたいと思っています。

特にローカルな対面での支援力を私は勝手にアクチュアルな支援力とか、ローカルの支援力と名前をつけているのですが、先ほど奥田さんがおっしゃったようなことと同じで、一般論としてその問題をどうすればいいのかだけではなくて、この町にDVで住所を隠してでも家を貸してくださる不動産屋さんはあそことか、中絶ができるお医者さんは誰とか、保険が利いてカウンセラーが置いてあるクリニックはこことか、そういうことがないと、本当の被害者の人をその町で救っていかなくて、その情報だけがあればいいわけではなくて、それをつなぐ支援者が顔で、あなたが頼むのだったら引き受けるみたいな病院とか、不動産屋さんがあって、やっと成り立つようなものだと思います。

遠藤さんがおっしゃったように、今、日本では最初の相談を電話などで受けたとしても、本当の各地の支援力が足りないのです、そこがうまくいかないと思っています。私たちのエリアやテーマだと、特にいのちの電話の方もおっしゃっていましたが、人材不足があって、ボランティアではできない分野だと思うのです。ですから、人材を育てることと、これがお仕事にできる収入が入るような支援者を育てていくような状況を生み出したいと思っています、それにはほかの国だと、私たちのようなテーマの支援は、民間NPOに行政が委託して、民間NPOの職員はちゃんとそれで食べていける、学生が就職先として選べるという状況になっているので、そういうことが日本でできないと、ボランティア不足ということは続いていくのではないかと考えています。

私たちも自分たちなりに人材育成を始めようとは思っているのですが、そうすると、従来のフードバンクで食料を配ってくださる活動はいいのですが、そこで住所、氏名を書けない人たちに対して、別の支援者がこの人たちの連絡先は私たちが知っていますから、食料をくださいと間に立つような支援なので、まっすぐに行政で全部やるのではなくて、それ専門の団体が担うほうが向いているのだけれども、担っている支援団体を信頼していただいて、ちゃんと仕事になるようにしてほしいというか、そういうことがずっと課題だと思っていて、今日の皆さんのお話を興味深く聞かせていただきました。

以上です。

○北波次長 ありがとうございます。

一巡目の最後になりますが、子育てひろばの奥山様、お願いします。

○奥山氏 今となっては私から始めていただければよかったと思うぐらい、最後になってしまってどうしようという思いであります。

今日ここに来るまで、ある助成事業の表彰式がありまして、このような状況ですので、オンラインでの表彰式でした。団体さんが十何団体あったのですが、各地から入っていただいて、表彰式をやった後、交流会をブレイクアウトで行いましたが、選ばれた団体さんがすごく多様なのです。子ども・若者の居場所支援、妊娠帰か産後の支援、外国籍の子どもたちの学習支援、いろんな活動の団体がいらっちゃって、その中で交流をしたところ、お互いに資金集めをどうしているか、永続的に運営していくためにはどうしたらいいか、人材育成はどうしているか、ほかの人たちから賛同を得るためにはどうしたらいいか等意見交換をすることで共通点や参考になることが多々ありました。

このように話し合うと、いろんな知恵もアイデアも出てくることを考えますと、地域で連携してやっているつもりではありますけれども、知らないことがたくさんあります。例えば今日も清水さんから自殺のデータの話があったのですが、産後うつに関していえば、先進国の中で日本は産後うつでの自殺率が高いわけです。その分析とか、状況などを知らせていただいたら、一緒にやっていけることがあるのではないかと、そんなことを考えました。

今日、資料はおつくりしたのですが、私たちは日常的なステージ、生活圏域での子育て支援になるのですが、そこは相談しやすいというか、日常会話があって、そこでの信頼関係の中で出てくる相談ですから、相談につながってもらうにも時間がかかるという思いであります。

地域を考えたときに、妊娠期から地域で包摂的に見ていかないと、親自身自分が育ったところで子育てがスタートで来ていないのです。地域に知り合いなどはいないのです。若者もそうだと思います。地域はもしかしたら少しいいところかもしれないと、赤ちゃんが生まれたスタートのところに地域側から働きかけることで、ここで生活していこうとか、子どもに何かあっても相談できる人がいるとか、そういうようになっていくと思っています。

そこを一生懸命やりながら、でも、自分たちだけではできないですし、発達支援のこととか、離婚の相談もありますし、困窮のことなども含めてありますから、今日ここで集まっていたいてくれる皆さんとともに、もっと深い連携ができて、これまでよりも当事者にとってプラスになるような活動ができればいいと思っております。

以上です。

○北波次長　ありがとうございます。

今まで皆さんから一巡いただきましたけれども、最初のほうで専門性を少しずらすとか、私どもは今回のプラットフォームでも、協力団体や賛助団体ということで、自治体や企業をこれから増やしていこうと思いますが、お声がけをしながら、連携の輪の中に入っていくことも考えています。

そのようなところで、今、おっしゃられた非日常、日常の話もありましたし、そういう社会活動というところに少しでも興味のあるいろんな主体が入ってくる、そういう仕組みもつくっていききたいと思います。

重要なのは、常に何かを動かしていく、また、先ほど堀井さんからありましたような、逆にいろんなエネルギーをちゃんと吸い上げていくような仕掛けも考えることが必要だということ、御意見として出たのかと思います。

ターゲットを絞り、恣意的に対象者を選ばないということで、データ、エビデンスもしっかりと重要なものとして考えていかなければいけません。これは行政として肝に銘じたいと思っております。

さはさりながら、全体をマクロの視点で見つつ、何に横串を刺せばいいのか。こういうようなところもしっかりと整理をしろというのは、事務局に対する指示ということも捉えておりますので、よく御指導、御知恵もいただきながら、整理をしたいと思っております。

いずれにしても、多様な主体が多様な人たちを相手にしたときに、自分たちだけではどうしたらいいかわからないときに、それは支援する側としても、孤独や孤立に陥らないようにするためにはどうしたらいいかというところもあるのかもしれませんが、プラットフォームが何らかの助けができ、最初の御挨拶のときにもありましたように、国で連携したことが地域にとってもよかったと見えるような仕組みにしたいと思っております。

意見交換の前に、私ども孤独・孤立対策担当室は2人の政策参与をお願いしております。若草プロジェクトからは村木厚子さんです。今日御出席です。もう一人は、NPO法人もやいから大西連さんです。今日は健康上の都合で御欠席でございます。幹事の一角として、プラットフォームの運営に全力を尽くしたいと思っております。

若干の時間がございますので、さらなる意見ということで、まずは村木さんから一言言っていたいた後、追加意見をお願いします。

○村木政策参与　参与という名前はいただいていますけれども、今日来てくださっている皆様方は、自分が役所にいたときに教えを請うた人ばかりなので、いろいろ教えていただきながら、自分もやれることをやっていきたいと思っております。

今日ここへ来る前に、ある小さい団体の将来像を議論するのにどういうことをやっているかという議論をしていたのですが、そのときにまず出たのは、議論するときの部屋は小さいほうがいいという意見でしたが、まさにそのとおりだと思っています。

連携については、1人の一つの悩みを解決するときの連携から、地域そのものをどうやってつくるというところまで、今日伺ったようにレイヤーがたくさんあるので、どうやったらこのテーマでの連携について、ちゃんとやり取りのできる議論になるか、これは北波さんたちと一緒に整理して、この後、いろんな形で議論ができるように工夫をしていきたいと思います。

引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

○北波次長 それでは、追加の意見をよろしくお願いします。挙手でも結構ですし、声を発していただいても結構です。大空さん、お願いします。

○大空氏 一つ御提案なのですが、孤独・孤立対策は、そもそも何だろうという話をみんなでしませんか。それは勉強会という形なのか分かりませんが、それをやるべきだというのは、お話を1周伺わせていただいて、改めて感じたところです。

この前、これと全く同じような場に遭遇したのです。それは世界保健機関が孤独・孤立対策について議論する場所で、WHOが昨年冬に孤独・孤立、向こうは略してSILというのですけれども、これを世界的な課題、要は喫煙とか、肥満と同じ課題に位置づけようということで、これは日本の動きに影響していて、WHOが動き始めたのです。その会合には15か国ぐらいから、まさに官民がいて、民だとアマゾンみたいなGAFAからも参加していましたし、イギリスの政府の関係者もいましたし、いろんなアクターたちがいたのです。

その場で何を最初にやったのかということは、孤独はこういう定義があります、その定義に対する違う意見もあります。イギリスではこういうことをやっています、日本では大臣を設置しましたみたいな、そういうインプットから始まって、その上でWHOとして何をしていこうか。これに置き換えて考えていくと、このプラットフォームで何をしていこうかということなのだと思うのです。

今回のプラットフォームは、内閣府のNPOのところに設置されているのではなくて、内閣官房の孤独・孤立対策担当室に設置をされているわけですから、それを言うと、新公益連盟さんなどは既にNPO連携をやっている団体さんも入っているわけですから、孤独・孤立対策という政策の中で何ができるかということなのだろうと思うのです。なので、その横串といたら、恐らく孤独・孤立対策の政策としての目標、アウトカムみたいなところに向けて何ができるかというのが、恐らくすごくナチュラルな議論になると思います。

これまで勉強会を何度もやったではないですか。ぜひこのプラットフォームでも勉強会というか、インプットをして議論するというブレインストーミング的な時間が必要なのではないかということで、今回のテーマとは全く違うので、本当に申し訳ないのですけれども、このテーマを議論する前に進める必要があるのではないかと考えております。

○北波次長 これは恐らくわくわく感みたいなもので、先ほど赤石さんがおっしゃったよ

うなことに通じると思います。ぜひ考えてみたいと思います。

あと、今、御欠席と言ったのですがけれども、大西さんがオンライン参加できそうなので、飛び入りになります。あそこに画面が出ております。

大西さん、よろしくお願いします。

○大西政策参与　よろしくお願いします。

コロナが陽性になってしまいまして、療養中でして、ただ、大分回復はして、今日も参加させていただきました。

参与として6月1日から関わらせていただいて、こういった形でプラットフォームができるまでに至っているのは、大変うれしく思っていますし、ただ、これからどういうことをやっていくのかということだと思っておりますし、今、直前に大空さんが話してくれたように、まずお互いの活動を知り合うこともそうですし、ここでどういうことを政策として実現していくのかというところを視野に入れながら、皆さんと議論できたらと思いますので、村木さんも私も皆さんと一緒に下働きをしながら動いていきますので、ぜひ引き続きよろしくお願いします。

今日は参加できずに申し訳なかったのですが、おかげさまで回復はしておりますので、引き続きよろしくお願いします。

私からは以上です。ありがとうございます。

○北波次長　ほかに御意見はございますでしょうか。

一日も早くコロナが収束し、膝詰めで話ができるような雰囲気であれば大分いいと思いますが、今はこういうところで、膝詰め風で議論を進め、また、動いている感、動き続ける、こういうプラットフォームでぜひとも御協力をいただきたいと思います。

まとめにはなっておりませんが、大西さんの代役で司会をした不手際をお許しいただきつつ、この座談会は一旦お開きとさせていただきたいと思います。

今後の皆様の御活動と御支援とプラットフォームに対する盛り上げ、こういうことについては、よろしく御指導のほどお願いします。

それでは、これにて座談会を終了し、進行を司会にお返しいたします。

○吉川補佐　北波次長、ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして「孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム　設立総会　第一部　座談会」を終了させていただきたいと思います。

第二部の設立総会は、18時40分から開始となります。

これからレイアウト変更を行います。

皆様におかれましては、大変恐縮ですが、席の移動がありますので、机上の御自身の資料をおしまいになっていただきますようよろしくお願いします。

また、レイアウトの変更の間、控室である小ホールにてお待ちいただくことも可能です。

なお、開始10分前、18時30分には改めて着席いただきますようお願いいたします。